

少年十字軍の教材論

面 高 正 俊

The Children's Crusade as the Teaching Subject

Masatoshi OMODAKA

は し が き

歴史教育において、十字軍の章になると、「重要な教材」として第四回十字軍が語られ、その次に「少年十字軍」にふれ、また教室にも、少年十字軍が記入された年表が、高々と掲示されている教場の情景を、しばしば目撃する。

では教科書はいかに表現され、その取扱い法はどうなっているのでしょうか。

○清水書院「日本の歴史と世界」

「そのころヨーロッパでひじょうに勢力の強力の強かった法王が、聖地を奪い返すことをよびかけると、王・諸侯や騎士ばかりでなく、農民や商人もその軍に加わり、少年や少女までが聖地に行こうとした。これを十字軍という。」(ibid.p. 122)

○東京書籍「新しい社会」(歴史)

「ときには農民や子どもたちまでが宗教的な情熱にかられ、あるいは東方の土地や富にひかれて遠征に加わった。」(ibid.p. 110)

○教育出版「中学社会」(歴史)

「少年によって十字軍が結成されたこともあったが、これはアフリカで奴隷として売られるなど、みじめな結果に終わった。」(ibid. p.115の註)

○同上、「中学社会」の教師用指導書

「導入のための資料、少年十字軍、」

「1212年の夏、フランスのある村の少年羊飼いであるエティエンヌは、聖地奪回に向うようにという神のお告げを受け、それを信ずる何千もの少年少女を引き連れて、マルセーユから7艘の船に乗り出帆した。ところが、この輸送にあずかった船主は極悪非道な行為にでた。途中2艘の船はサルディニア附近で難破したが船主は残った5艘の船に乗った少年たちをアレクサンドリヤに連れ去り、ここで一人残らず奴隷に売りとばしてしまった」(ibid. p.134)

このような教科書の記述に対して、たとえば鹿児島県中学校社会科教育研究会は、「中学社会・歴史資料集」を編集

している。その41ページに、右のような十字軍の表をのせ中学生への教育資料としている。

当時の十字軍熱の熾烈化、あるいは宗教的情熱を物語る好教材として少年十字軍は、たしかに教育的効果をあげること

十字軍の遠征

回	年代	参加者	結果
1	1096～99	ロレーヌ公 ノルマンディ公	エルサレム王国など建設
2	1147～49	神聖ローマ皇帝 フランス王	ダマスクスで敗れる
3	1189～92	神聖ローマ皇帝 フランス王 イギリス王	独仏軍は敗れ、イギリス軍だけエルサレムにそむいたが敗れる
4	1202～04	フランドル伯など モンフェラ伯	コンスタンチノーブル攻略 ラテン帝国建設
少年 十字軍	1212	独・仏の少年少女	独…イタリアから帰国 仏…一部帰国、他は奴隷
5	1228～29	神聖ローマ皇帝	エルサレムを占領したが帰国
6	1248～54	ルイ9世	エジプトで敗れ、捕りよとなる
7	1270	ルイ9世	王戦死す（チュニス）

は否定できない。ことに「東京書籍」の前掲11ページの「ときには……子どもたちまでが宗教的情熱にかられて……」の説明として、少年（子ども）十字軍をとりあげるなら、中学生の関心は、「子ども」の一語に集中し、教場の雰囲気はいやが上にも高揚されるであろう。

さて、少年十字軍が、中学生の興味を喚起し、教育効果が高揚されたとしよう。その場合の教育効果はどのようなものであろうか。筆者は研究授業で、再三、十字軍をテーマにした場面を目撃し、講評の中で、すばらしく教育効果が得られたという諸講師の話も聞いてきた。だがその場合、歴史教育としての教育上の効果は何であったのかと、最近、特に疑念を抱くようになった。

歴史教育においては、単純に歴史事実を知識として詰めこませるのではなくて、理解力を高めなければいけないという。これは当然のことで、この目標を達成するために「資料」が生徒の前に提示される。歴史学習上の資料は、史料の場合と、絵画や模型、地図あるいはエピソード等の補助教材を指すこともある。また関連ある歴史事実を示して教科書の内容を補足することもある。たとえば、東京書籍の教科書にある「東方の土地や富にひかれて……」の好例として第四回十字軍を例示する。その場合は、第四回十字軍は史実としての「資料」なのである。日本の古代の教材として、魏史倭人伝の一部を示すとすれば、それは資料として史料を例示したのであり、倭人伝の記事が当時の日本の史実に合致するか否かは問題ではない。ところが第四回十字軍を例示したあとで、少年十字軍を資料として提示した場合には、これは厳然たる史実として受けとられることになるのではないか。史料として少年十字軍に関する史料、たとえば無名の著者が北フランスの Laon で書いたといわれる年代記（*MGH.ss.xxVI, pp.442～3）を意識して与えるとすれば問題はないが、第四回十字軍と同じ史実の取扱いのつもりで与えたとすれば問題である。後者のような目的で資料として提示する場合には、この事件が史実として、学界に定着せるものでないと不適当なる、極言すれば歴史教育上有害なる資料ということになるのではなかろうか。

少年少女が一団となってエルサレムに行進をはじめたということは、まことに稀有の現象で、多くの年代記がその記事を掲げている。19世紀になると歴史学者もこれに関心を示し、G.de Jansen^①やR.Röhricht^②等の論文が出されたが、今世紀に入って、D.C.Munro^③によって、関係史料の考証と批判がはじめられた。その後、J.E.Hansbery^④、P.Alphandéry^⑤、J.F.C. Hecker^⑥等の史料批判や、十字軍の性格、あるいは心理学的方法でのアプローチなどが試みられたが、少年十字軍なる事件の実存を問う点にまではいたらなかった。ところが今世紀の後半になると、少年十字軍の本質に迫る研究が、Giovanni Miccoli^⑦、J.Delelande^⑧、N.P.Jacour^⑨、H.E.Mayer^⑩、P.Raedts等によって進められ、なかば伝説的なヴェールに包まれた少年十字軍の実体がかなり明瞭になってきた。

日本では橋口倫介著「十字軍」(岩波新書)が、少年十字軍についても若干のページをさいており、「世上传えられる少年十字軍のイメージはかなり史実と相違しており、その誤ったイメージにもとづいて不当な評価をうけている。まず名称であるが、古今東西共通して、未成年者を意味する『子ども(ラテン語史料では“Pueri et Puella” 英語の Children フランス語の enfants ドイツ語の Kinder)』が使われていることは事実である。しかし、そこに誤解の一つの原因がある。史料によると、この十字軍には非常に多くの大人が参加しており、そのうち不自由身分の使用人、家内労働に従事する召使いなどは社会身分が低いというだけで年齢的には成年である。『当然のことながら、その中には娼婦もいれば盗賊もいた』のであって、それらはもちろん大人である。つまり、少年十字軍とは、ある靈感をうけた一少年がリーダーとなり、仲間の同年輩の未成年者を多数ひきつれて巡礼に出発したという、発生の時点での特色をとらえた表現であったのである。」(十字軍174～5ページ)と、一応の学界の成果を要約した形で、簡潔に示されている。

本稿では、Peter Raedtsの英訳、“The Children’s Crusade of 1212” (Journal of Medieval History Vol3.No4. 1977)を紹介して、教材として取り上げる価値ありや否や、ありとすればその取扱いについて検討したいと思う。

註 * Chronicon universale anonymi Laudunensis.

- ① G.de Jansen; Etienne de Cloyes et les Croisades d’ enfants au XIII^e siècle. (1891)
- ② R. Röhricht; Der Kinderkreuzzug 1212. Historische Zeitschrift 36; pp. 1～8 (1876)
- ③ D.C.Munro.; The Children’s Crusade. (American Hist. Rev. 19 (1913～4) pp. 516～24)
- ④ J.E.Hansbery; The Children’s Crusade. (Catholic Hist. Rev. 24 (1941～5) pp. 30～8)
- ⑤ P.Alphandéry et A.Dupront; La Chrétienté et l’idée de croisade. 2 Vols. (1954～9)
- ⑥ J.F.C. Hecker; Die großen Volkskrankheiten des Mittelalters (Historisch-pathologische Untersuchungen (1865)
- ⑦ G.Miccoli; La crociata dei fanciulli. (Studi medievali.) (1961) II, pp. 407～43
- ⑧ J.Delelande; Les extraordinaires croisades d’ enfants et de pastoureaux au moyen age (1962)
- ⑨ N.P.Zacour; “The Children’s Crusade” これは、R.M.Setton (ed.); A.History of the Crusades (1962)の中にある
- ⑩ H.E.Mayer; The Crusades. (1972)

少年十字軍に関する根本史料

少年十字軍に関する根本史料は極めて数少く、そのうえ断片的記述で、各地の年代記の中に散見するのみという有様であるらしい。それでも50点前後はあるという。この中でMGHに収められているものを探ると、史料集の Sect (7), *Scriptores Rerum Germanicarum Scholarum Separatim edit* (略して S.R.G,s.s.) の中にあり、これを表示すれば次のようになる。各年代記の頭部に、これからの引用に資するために便宜上一連番号を付した。ローマ数字はsect (7) の巻数を、その次の算用数字はページ数を示す。

No.1	Alberti Milioli notarii, Regini Cronica imperatorum	XXXI	pp.580~667
No.2	Alberti Stadensis Annales	XVI	pp.271~379
No.3	Albrici monachi Trium-Fontium Chronicon	XXIII	pp.631~950
No.4	Annales Admuntenses	IX	pp.579~93
No.5	Annales Elwagenses	X	pp. 15~20
No.6	Annales Floreffenses	XVI	pp.618~31
No.7	Annales Gemmeticenses	XXVI	pp.491~500, 508~511
No.8	Annales Januenses	XVIII	pp. 1 ~356
No.9	Annales Marbacenses	IXのVII	pp.1 ~103
No.10	Annales Maurimonasterienses	IX	pp.104~9
No.11	Annales maiores Zwifaltenses	X	pp. 51~64
No.12	Annales S.Medardi Suessionensibus	XXVI	pp.518~22
No.13	Annales Neresheimenses	X	pp. 20~5
No.14	Annales S.Rudperti Salisburgensis	IX	pp.758~810
No.15	Annales Scheftlarienses maiores	XVII	pp 334~43
No.16	Annales Spirenses	XVII	pp. 80~5
No.17	Annales Thuringici breves	XXIV	pp. 40~1
No.18	Annales S.S. Udalrici et Afrae Augustensis	XVII	pp.428~36
No.19	Annalium Rothomagensium Continuationes	XVI	pp.501~6
No.20	Auctarium Mortui Maris	VI	pp.463~9
No.21	Auctarium Vindobonenses	IX	pp.722~4
No.22	Chronica minor auctore minorita Erphordiensi	XXXXII	pp.486~671
No.23	Chronica Regia Coloniensis continuatio IIa	XVIII	pp.171~96
No.24	Chronica Regia Coloniensis continuatio IIIa	XVIII	pp.199~256
No.25	Chronica universalis Mettensis	XXIV	pp.502~26

No.26	Chronicon rhythmicum austriacum	XXV	pp.349~68
No.27	Chronicon Ebersheimense	XXIII	pp. 427~53
No.28	Chronicon Ellwacense	X	pp. 34~51
No.29	Chronicon universale anonymi Laudunensis	XXVI	pp.442~3
No.30	Continuatio Argentinensis	XXII	pp.341~2
No.31	Continuatio praedicatorum Vindobonensium	IX	pp.724~32
No.32	Ellenhardi Annales	XVII	pp.101~4
No.33	Flores Temporum auctore fratre ordinis minorum	XXIV	pp.220~50
No.34	Gestorum Treverorum continuatio IVa	XXIV	pp.368~99
No.35	Henrici de Heimburg Annales	XVII	pp.711~18
No.36	Hermannii Altahensis Annales	XVII	pp.381~407
No.37	Johannis Codagnelli Annales Placentini Guelfi	XXIII	
No.38	Johannis Longi Chronica S.Bertini	XXV	pp.736~866
No.39	Magni presbiteri Chronicon	XVII	pp.476~534
No.40	Reineri Annales S.Jacobi Leodiensis	XVI	pp.632~83
No.41	Richeri Gesta Senonienses ecclesiae	XXV	pp.249~345
No.42	Salimbene de Adam Cronica	XXXII	
No.43	Sicardi de Cremona Cronica	XXXI	pp. 22~181
No.44	Willelmi Chronica Andrensis	XXIV	pp.684~773

教育出版「中学社会」（歴史）の教師用指導書のエティエンヌの説明に補足して、先述の「十字軍」（岩波新書）を引用すると、

「このような突然の巡礼団発生は11世紀いらい珍しいことではなく、1101年の十字軍にも1147年の遠征にも子どもの群が現われたらしく、そこから一つの伝説が生まれた。指導者となるべき少年にキリストが出現し、神の召命を伝え、大人のなし得なかったエルサレム解放の使命を託するというのである。牧童エチエンヌはそのような幻視を経験して、内心の命ずるところに従ってフランス王のもとに行きその意図を明かした。王はパリ大学の教授たちに、この現象をどのように解釈すべきか、また多数の少年たちをどのように取りあつかうべきかを諮問した。その結果、聖地巡礼は不許可とされ、大部分の子どもたちは家に帰された。六月のことである。しかし、この勧告を聞きいれず、一部の聖職者に援助を受けて激励された少年群は、ローヌ川渓谷沿いにマルセイユまで来て、そこで二人の船主にたのんで聖地向けの七隻の大船に分乗した。『その人数は三万人』であったと年代記は伝えているが、これは誇張であろう。」（橋口倫介 *ibid* pp. 175~6）

Steven Runciman によって、その続きをのべると「参加するもの3万人、12才を越すものはなかった」^⑩とある。

少年十字軍はフランスのみでなく、ドイツにもあった。Runciman の引用を続けると、

「Stephen の説は Rheinlanden にも伝わり Stephen (Etieune) が出発した数週間後、ニコラウスと称する少年がケルンで同じようなメッセージを読みはじめた。彼もエチエンヌと同じく、進路の海は二つに割れて道ができると説き、やがてケルンに集った多くの少年少女がイタリアに向った。フランスの十字軍よりは年齢も若干上で、少女の数も多かったように見えた。そのうえ貴族出身の少年分遣隊が付いたばかりでなく、評判のよくないゴロツキや売春婦までも加わった。一行は二群にわかれ、一群はニコラウス自身が率いたがその数2万、ライン河を廻り、アルプスを越えてジェノヴァに着いた。このコースは少年には無理な道程で、総勢は出発時の三分の二以下となった。ジェノヴァでは奇跡の現われなさをみて落胆し、迷から醒めた子供の多くはジェノヴァの市民となった。

しかしニコラスに従う多くのものはピサに移動し、パレスチナに向う2隻の船に便乗した。たぶんパレスチナに着いたはずである。ニコラスは乗船せず、残りのものを引率してローマに向った。教皇インソセント三世は、少年たちの行動には感激したが、しかし毅然たる態度で故郷に帰ることを命じ、成人したならば、神への誓いに対し忠誠でなければならぬゆえ、十字軍に参加せよと諭した。

女の子は道の険しさに堪えられず、イタリアの町や農村にとどまったが、ごく少数のものが翌春にラインランドにたどりついた。子供たちを破滅に追いやられた親たちは怒ってニコラスの父親を逮捕、絞首刑に処した。ドイツの第二群はアルプスのサン・ゴットハルト越えしてアンコナの海にたどり着いた。しかし海は二つに分かれず、このため東海岸ぞいに移動し、Brindisi についたが、ここでも奇跡はおこらなかった。それで一部の少年はパレスチナ向けの商船に便乗したが、残りのものは失望にうちのめされて帰路についた。』^⑧

と述べているが、この物語の真実性について、聊かも疑念を抱いていないようにみえる。エチエンヌたちが奴隷として売却されるという物語について、Runciman は、伝承によるとことわりながら、2人の商人は Hugh the Iron と William Pig という人名をあげ、

「用意された7隻は少年たちを積みこんで出帆したが、その後は何のニュースもなく18か年がむなしく経過した。1230年、一人の僧侶が東方から帰仏し、不思議な話を伝えた。彼はスティブン(エチエンヌ)に従った若い僧侶であったが、サルデニアの沖で2艘は難破し、乗船者は海に投げ出された。残りの5艘はサラセン人に包囲され、全員捕虜となり、奴隷として売却された。彼の話によるとその数は700人、このうち18人はイスラム教への改宗を拒否したために殉教者となった。しかしエジプトの長官は西方の言語と文字に興味を持ち、彼らを金で買いとり、通訳・教師・秘書として使用し、改宗を強いることもなく、カイロで捕虜身分とはいえ、幸な生活を送った。のちに解放されて、フランスに帰国できた」

とのべて、さらに

「マルセーユで2名の悪徳商人がサラセン商人に頼まれて、皇帝フリードリッヒⅡの皇子を連

れ出さんとして露見し、絞首刑に処せられたが、この物語と一致する。』^⑧ のように、この物語とのべて、全ストーリーを全面的に肯定している。彼が註にあげた参考資料は、de Janssen, p. Alphantery, D.C.Munro. それに Winkelmann の *Geschichte Kaiser Friedrichs des Zweiten, I.* (pp.221~2) をあげているのみである。では、彼はこの物語を長々と記しているが、根本史料は何によったのであろうか。かれが引用史料として示したものは、MGH. *Scriptores, vol.XVI* の *Annales Stadensis* である。これはわたしがさきにあげた MGH に掲載された年代記表の No.2. *Alherti Stadensis*, のことである。これから以降、この一覧表に記載の年代記を引用するときは、この No. と略記たとえば No.2. *Alh. Ann.* と記すことにする。さてこの No.2. *Alh. Ann* は、ハンブルグの近く Stade の僧院長 Albert が執筆したものとされている。彼の在職期間が、K. Fiehn^⑨ によると、1232~1240年と推測されたが、Albert はその後も書き続けたとみえて、1256年まで同筆であるという。それゆえ少年十字軍発生後30年近くたってから遡及して書いた年代記である。すこし長文だが一部を引用すれば、

“Circa idem tempus pueri sine rectore, sine duce, de universis omnium regionum villis et civitatibus versus transmarinas partes avidis gressibus cucurrerunt, et dum quaereretur ab ipsis, quo currebant, responderunt; *Versus Iherusalem, quaerere terram sanctam*” (No.2. *Ann. stad.* p.355) (同じころ指導者、指揮者なき pueri (少年たち) が、わが各村、各町から集り、海に向って急進せんとし、何処に向って進むかと自問し、『イエルサレムへ。聖地を奪回するために』と自答して。)

“Papa auditis hiis rumoribus, ingemiscens ait; *Hii pueri nobis inproperant, quod ad recuperationem terrae sanctae eis currentibus nos dormimus*”

(教皇はこの噂に歎息して言った。「これら子供たちは、われわれを非難した。それは我々がまどろんでいるあいだに、聖地を奪回すべく彼らは急進しつつあったがためである」と。)

しかし、教皇が歎息して言った語について、H. Roscher; *Papst Innozenz II und die Kreuzzüge* (Göttingen. 1969) によれば、教皇がわの文献には、少年十字軍について何一つ記されていないので、この教皇云々は、信用できないという。

少年十字軍について、もっとも詳細な記事を残しているのは、No.3 の *chron. alb.* である。これは Troisfontaines の Alberic が書いたものとされているが作成年代の推定は困難である。彼はトロワフォンテーヌ出身の修道僧で 1232 年から遡及して書き始めたものらしいのであるが、この原本が Huy の近くの Neufmoutiér 寺院の所有に帰し、この寺院で、かなりの挿入改竄が行なわれたものらしい。その時期が 1252 年から 1295 年の間とされているので、この記事も事件から数十年後に書きこみが行なわれたことになる。1212 年のこの事件の書き出しが「*expeditio infantium* というまことに不思議なる事件は、この年である」から始まっている。(No.3. *chron. alb.* p.893) pueri なる語が *infantes* (幼き子供たち、幼児たち) と変化していることに注目したい。

puer よりも *infans* が、どうみても年小の子、幼稚園児や小学校低学年児を連想させるが、こん

な幼児が長旅にたえられるだろうか。また自主的に参加し得るだろうか。少年十字軍についてフランスでは *croisade d'enfants* というが、伝説の *enfants* も、この年代記の *infans* がもとになったのではあるまいか。*infantes* が難破したり、奴隷に売られていく経過が、この年代記に語られている。これに対し、Munro は、この話は作り話であるとして史実から除外することを要求するとともに、400人の僧侶が十字軍に参加するという記事もあやしく、イズラム教徒が、子供に改宗せねば殺すとおびやかすなど、信じ難き記事であると一蹴している。⁶⁾ かくみると、*puer* から *infans* へと変ることによって、この事件が伝説的色彩を濃くしていくように思われる。そこでこの事件については、事件発生に最も近き時点で、最も関係地に近接せる地点で書かれた年代記が、最も信用がおける根本史料ということになる。Raedts はこのために50余篇の年代記を、次の三つに分類した。

- 一等史料 1212～20年ごろに書かれ、行進路に近い地点で書かれたもの、
- 二等史料 1220～50年ごろに書かれ、筆者が事件の伝聞に、なまなましい情報を持つことができたもの
- 三等史料 1250年以降に書かれ、事件目撃者からの直接の聴取体験を持たず、第二、第三者の手になる情報で書きあげたもの。

この分類に従えば、S.Runciman 引用史料は二等史料となり、No.3の *Alb. Chron* は、どんなに詳細な記事であっても、三等史料ということになる。Raedts が一等史料としてあげているものの中で、MGHにあるものは

- | | | |
|---------------------------|-------------------------------|---------------------------------|
| No.5 <i>Ann. Elw.</i> | No.6 <i>Ann. Flor.</i> | No.8 <i>Ann. Jan.</i> |
| No.15 <i>Ann. Schef.</i> | No.23 <i>Chron. Reg. I a.</i> | No.24 <i>Chron. Reg. III a.</i> |
| No.29 <i>Chron. Laud.</i> | No.37 <i>Johan. Ann.</i> | No.40 <i>Rei. Ann.</i> |
| No.42 <i>Sali. Cron.</i> | No.43 <i>Sic. Cron.</i> | |

一等か二等史料か判然し難きものとして、

- | | |
|------------------------|-------------------------------|
| No.14 <i>Ann. Rud.</i> | No.34 <i>Gest. Trev. Iva.</i> |
|------------------------|-------------------------------|

をあげている。

一等史料の記載例として、No.5 *Ann. Elw.* は、1212年は、わずかに一行あるのみで、

“Tunc multi pueri sunt effecti peregrini” (*ibid.* p.20)

長い記事の例でも、No.15 *Ann. Schef.*

“Eodem anno quidam puer nomine Nicolaus surrexit, qui multitudinem puerorum et mulierum sibi aggregavit, cum quibus Ierusalem, crucem dominicam liberturus, iussu angelico adire debere, mare sicut quondam populo Israelitico siccum iter prebere, asserebat.”

このように記事はきわめて簡潔で、断片的である。これに反してさきにも見たとおり、*pueri* を *infantes* と記したのはNo.3の *Alb. Chron* であり、*parvuli* (小児) と記したのは、No.44の *Wil. Chron.*

で、共に3等史料に属する。

P. Raedtsによると、作成年次がさがるほど、簡潔な、断片的記録に、枝葉がつけられて、これに想像力が加わり、No.3の *Alb. Chron* のような伝説的な記述に変わったと説明している。^⑧

No.29 *Chronicon universale Anonymi Laudunensis*. すなわち作者不明の Laon の年代記は、Raedts の分類では一等史料となっている。その記事に、エチエンヌと称する羊飼が Clois の村に現われ、「一人の貧しき巡礼者の導きで、主が少年の前に現われ、パンを乞われた。そしてフランス王への手紙を托された」という記事に対して、Alphandéry は、この話が伝説だとして、同じ話が1180年ごろプロヴァンで大騒ぎをひきおこした羊飼の少年 Bénézet の焼き直しであると論じている。^⑨

No.19 *Ann. Roth.* p.501を見ると、フランスの町々で、旗やローソク、十字架などを持った行進があちこちで見られ、地方語で詩歌を唱えたものとみえる。

このような運動が、パリー、あるいはサン・ドニーへ向っての行進となった。ところが Raedts の解釈によれば、これらの運動が、イエルサレムの解放を呼びかけてはいないということ。むしろ、1213年に始まる教皇からの十字軍参加説得の前奏曲となっているという。エチエンヌもこのような運動の立役者の一人ではなかったかと思われる。そこで彼は、ドイツ型の少年十字軍はフランスの一等史料からは察せられないとのべている。^⑩

ところが、ドイツ型への解釈の変化がおこり始めた。それが最初に現われるのが No.44の *Will. Cron* であるという。

“Infinita etiam multitudo parvulorum de diversis civitatibus, castellis, opidis et villis, nullo penitus exterius monente, confluit, et versus mare Mediterraneum properantes, cum a parentibus vel ab aliis interrogarentur, quo vellent ire, quasi uno edocti spiritu singuli et universi responderunt; ‘Ad Deum’! (p.754)

(子供らは、各町、各城下、各村に集合し、地中海の海に向って急進し始めた。彼らは何処に行くのかと問えば、「神のもとへ」と答えた。)

この年代記の記事から、No.3の *Alb. Chron* へと発展するものようである。

Munro によると、ロワール河以南になると少年十字軍の記事が全然見られず、以北でもフランスの年代記で、地中海へ巡礼団が向ったという記事がないことを指摘している。^⑪

これに対してドイツがわの年代記で、No.23 *Chron. Reg. I a* すなわち Köln の年代記は、マルセーユに向ったとある。かく見ていくと、トロワフォンテーヌの Alberic の言う北フランスの行進と、ドイツ少年十字軍とが、後世になって、ゴツァにされたという Zacour の解釈^⑫ は、きわめて説得的である。

では少年十字軍は実際に存在したのであろうか。この点について、No.7 *Ann. Gem.* “Facta est commocio puerorum.” として、Raedts の語を借れば、「1212年におこった他の事件は省略してでも、この十字軍にはふれている」^⑬ ほどであるから、この事実を否定することはできない。しか

しドイツ少年十字軍は否定し得ないとしても、フランスのエチェンヌの行動を、ドイツのそれと同じように解するのは困難である。教育出版が、わざわざエチェンヌたちを少年十字軍のモデルであるかの如く取あげているのは問題である。では、ドイツ少年十字軍の本質は何か。これを次章で論ずることにする。

註

- ① A History of the Crusades. 第三卷 The Kingdom of Acre. p. 140
- ② ibid pp. 141~143
- ③ ibid pp. 143~144
- ④ Fiehn, K.; "Albertus Stadensis." Historische Vierteljahresschrift 26 (1931)
- ⑤ Munro, D.C. ; "The Childrens Crusade" American Hist. Rev. (1913) p. 520
- ⑥ Raedts ; ibid pp 280~1
- ⑦ Alphaudéry ; "La Chrétienté et l' Idée de Croisade" p. 117
- ⑧ Raedts; ibid p. 293
- ⑨ Munro. ; ibid p. 520
- ⑩ Zacour, N. P. ; "The Children's Crusade" p. 337
- ⑪ Raedts ; ibid p. 280

Puer の 意 味

岩波新書「十字軍」の著書が述べているとおり、*puer* と記されていたが故に、むしろ誤解を生んだと思われるが、二等史料の No.27 Chron. Eb を引用すれば、

Quidam puerulus Nicolaus nomine veniens a pago Coloniensi, multo puerorum……. sicper totam Alemanniam et Galliam servulorum, ancillarum et virgum infinitus numerus……. (p.450)

puer に対し、*puerulus* とあるが、形容詞で年少の、愛らしき、男または奴隷の意味で、年齢推定は困難。*servulorum*, は *servulus* (若い奴隷) の複数属格であるから青年奴隷と解してもよいし、当時奴隷は存在しなかったとすれば、体僕と解してもよからう。*ancillarum* は *ancilla* (女奴隷) の複数属格で、*servulus* の対語とみれば、若い女奴隷、*virgum* は *virgo* (処女) の複数属格なるゆえ、日本の戦前の処女会の構成年齢を想定ればよからう。その数が *infinitus numerus* とあるゆえ、龐大な青年女子群ということになり、*puelle* なる語から連想される少年少女の集団とは思われない。それどころか、年齢と関係なき奴婢クラスの集団を示しているようにさへ見える。

同じく二等史料の No.9 Ann. Marb.

“*pueri et puelle, non solum minores sed etiam adulti ; nupte cum virginibus*” (p. 82)

(少年少女たち、単に成人したるものだけでなく、結婚したる女たちも、処女の女たちも一緒に) 二等史料をもう一つ。 No.19 Ann. Roth.

“*cum aliquibus adolescentulis et senibus*” (青年も老人も一緒に)

adulescentulis 形容詞としては若輩の、名詞としてはおとなの非常に若いもの、青年でを意味する。Ann. Roth の記事は、その原本があるかもしれないというので二等史料の範疇に入れてあるが、*puer* が年齢的に、*adulescentulis* より年少を指すものと意識して書いているのであろう。

これらの史料に対して、一等史料をみることにしよう。No.8 Ann. Jan.

“*multitudo maxima peregrinorum, defferentes cruces et bordonos atque scarsellas, ultra septem milia arbitrau boni viri, inter homines et feminas et pueros et puellas*”

(巡礼の大群衆は、十字架と巡礼用杖、そのうち、旅の袋までかかえ、その数7千人以上の分別ある良き兵たち、その中には男、女、少年、少女) (ihid p. 131)

No.37 Johan. Ann.

“*Theotonicorum puerorum et infantium lactantium, mulierum et puellarum.*”

(ドイツ人の *pueri* と、若い子持ちの女、成人の女(人妻)と *puellae*) (p. 426)

若い子持ちの女と対称の *puer* は、青年であろう同じく一等史料、No. 4 Ann. Adm. (p. 592) では

“*expeditio puerorum utrius que sexus...et preterea virorum et mulierum provectorum*”
mulierum は *mulier* の複数属格であるが、人妻を指す。

(男女の少年たち、さらに年とった男たち人妻たち) と記され、

No.14 Ann. Sal. (p. 780) では、

“*plurima hominum utriusque sexus et etatis multitudo*”

この Salzburg の St. Rupert の年代記には、*puer* なる語は全然使用されておらず、*etatis multitudo* が *hominum* と対称的に用いられている。*etatis* はこの場合、壮年期、または老年期に入った人を指す語としか解しようがない。

(男・女の大部分と、年とった群衆) とでも訳すべきか。この年代記を見るかぎり、少年、少女らしきもの一名も出てこない。

一等史料の中で、少年少女、幼児の語がみえるのは、Köln の二つの年代記である。特に Köln は、ニコラスの運動の一拠点であっただけに、ここの年代記の記事は重要である。

“*multa milia puerorum a sex annis et supra usque ad virilem etatem*”

(6才から成人せる男子までの数千の *puerii*)No.23, Chron. Reg. I a (p. 191)

“*puer diverse et conditionis..... Quorum exemplo multitudo iuvenum et mulierum cruce se signantes, cum eis ire disponunt*” (No.24 Chron. Reg. III a.) (p. 234)

(年齢も境遇もまちまちの *pueri*.....

この十字軍に参加せる男女の大多数、若い男性、女性) この場合、少年、少女という意味はでてこない。

No.29 Chron. Laud. には

“*cum coëvis suis pastoribus*” (p. 70)

の句が見える。coëvis の意味はつかみ難いが、coevitas、或は caevus から coeval の語が生じた
 ば、同じ年輩のという意味となる。そこで(同じ年ごろの牧師(牧夫)たちと一緒に)
 pastoribus→pastor(単)は、ここでは牧師と解したい。すると、牧師と同じ年ごろの pueri となる。

以上の引用例で、puer とのみ出てくる史料と、大人や子供を並列せるものがある。Raedts は
 中世に使用される年齢別の語を、Hofmeister, A; "Puer, Juvenis, Senex;" zum Verständnis
 der mittelalterlichen Altersbezeichnungen,⁹⁾ (1926)

の説に従って分類し、

infanta. …………… 幼児

pueritia. …………… infanta より年上、7才～14才ぐらいまで

juventus, utis …… juvenis …………… それより年長者で28才まで

puer は、両方を含むと解している。

このように puer の語は年齢的には幅広く使用されるが、さらに職業的、身分的に使用される
 ときは、年齢のはばは、もっと拡大される。一番の好例は、キリスト教で言う、神と子の場合の
 「子」が puer である。pastor 牧夫もまた「神」と「子」の関係で語られるので、puer=pastor と
 なるゆえ、牧夫を牧童と解する傾向があるが、pastor は牧師、司祭の意でもあるから、puer だけ
 では単純に子供と理解することは危険である。

英語で、boy の語が、列車やホテルのボーイのごとく、下男、給仕等の意味に使用されるが、
 puer も同じような意味で使用される。No.27 の Chron.Eb で、すでにみたように、servus(奴隷)
 ancilla(女奴隷)等が含まれていたことを示している。当時の servus は、Leibeigene と解したほ
 うが、より近いとされているが、puer もまた、Leibeigene と同義に使用されるらしい。

Mayer は、少年十字軍の主体者を貧民層としてとらえている点で、極めてユニークである。職
 業的な意味で puer を使用すれば、彼らは pauperes(貧民)であつたらう。この運動の主体者が
 pauperes であつたとすれば、それはもはや、enfants, Kiuder, children の概念とは、遠く離れた
 ものになってしまう。ところが、二等史料から三等史料へ、特に、No.44 の Will. Chron. や、No. 3
 の Alb. Chron が、ことさらに puer を年齢的にのみ強調して記述しているのはなにゆえであろ
 うか。

これについては P. Alphantéry et Dupront が、明確に解答してくれている。即ち、中世の子
 供崇拜の現れであるという。子供の天真爛漫さが、キリスト教の善と結合し、子供たちが喜んで十
 字軍に参加する姿は、喜んで神の祭壇に身を捧げる姿として、高く崇拜された。例の expeditio
 puerorum が、50余年を経過するうちに伝説化し、迷惑がられたこの十字軍が美化されていく。そ
 の中で年齢とは余り関係のない意味で使用された puer が、子供崇拜のムードの中で、年齢という
 狭義の解釈に変化し、少年、ついで child, eufant とまで理解されるようになったものと思われ
 る。

ここまでは、一応の通説にまでなってきたことで、新書の「十字軍」で、著者の橋口氏が簡潔で

はあるが、その事を指摘している。しかし私が特に Raedts を紹介する目的は、その段階を一步進めて、pueri を13世紀の社会的変革の中でとらえた点である。

Raedts は、G. Duby; *Medieval Agriculture, 900~1500*^② の主張する12世紀の経済的変革の中で発生した、新しい階級、即ち農村プロレタリアート説に共鳴して、これを少年十字軍の主体者と解したところにある。Dubyによると、この新しいプロレタリアートは、当時の文献で、やはり pueri または pastores (牧夫) と表記されているという。

12世紀になると耕地(virgate)の分割は極限に達し、農家の多くの子供は、法定相続人を除いては、ほとんど遺産=virgateの配分にあずかり得なかった。彼らは結婚して一家を構えることもできない状態にあった。彼らは生きる為に日傭労働者、あるいは農場労働者として働き、かろうじて生計を得ていた。彼らがありづける職業の主なものや羊の番人であった。それゆえ Dubyによれば、農民人口の中で、一番危険な存在が、この新しい階層すなわち pueri であったという。^③

この pueriこそ、少年十字軍の pueri であるというのが Raedt の主張である。^④ No.23 の Chron. Reg. II a の p.191, No.9 Ann. Marb. p.82 の中に出てくる、「聖地に行くために、犁や家畜を見捨てて十字軍に参加」したのは、まさに、この二、三男層で、遺産の配分にあずかり得ぬ連中ということになる。

Raedts によると、13世紀初頭から、このぼう大なる pueri 即ち農業プロレタリアートが、人口の多き地帯を中心に、仕事を求めさまよっていた。「この動きを、一般人は彼らの悲惨なる日々の生活からの逃避と見たに相違ない。しかし彼らはどこに移ろうと、ほとんど失うものは何もなかった。いかなる変化も、彼らをこれ以上に悪化させることは、あるまいと思われた。」^⑤のである。しかるがゆえに、彼らは行進した。これが *Expeditio Puerorum* であったと主張する。

註

- ① A. Hofmeister; "Puer, Juvenis, Senex." *Papsttum und Kaisertum (287~316)* München. 1926
- ② G. Duby; *Rural Economy and Country Life in the Medieval West (1968)*
; *Medieval Agriculture, 900~1500*
—Fontana Economic History (1972) 1の207~10
- ③ Duby ; *ibid* pp. 207~10
- ④ Raedts ; *ibid* p. 298
- ⑤ Raedts ; *ibid* p. 299

む す び

M.G.H をみると、たとえば、*Ex Annalibus. S. Stephani Cadomensibus*, や *Annales Millicenses*. または *Annales S. Paul Virdinensis*. あるいは *Ex Annalibus S. Medardi Suessionensibus* などの年代記には、少年十字軍の記事は一行も出てこない。しかしこれは例外

で、50余の記代記が、この *expeditio puerorum* について記していることは、この十字軍が単なる伝説でなく、事実として存在したものであること。それ故、No. 5 *Ann. Elw.* は年々の記事、わずかに、二行しか記述していない、簡単な年代記なのに、1212年については、わざわざ

Tunc multi pueri sunt effecti peregrini (p. 20)

と記した。これが戦士 (*miles*) よりなる十字軍とは、規模も性格も異なる、一般民衆の十字軍 *popular Crusade*. (民衆十字軍) の一つではあるが、*Ann. Elw* を見れば、単なる *pueri* の巡礼団と言っても過言ではあるまい。

Raedts 流に解すれば、一種の新天地を求めての無産農民の移民運動とも見える。しかし、彼らの運動は決して歓迎されなかった。むしろ彼らの行進は、教皇庁には、フランス革命時、ヴェルサーユに行進する女性軍と映じたのであろう。逆に、参加せる多くの *pauperes*, = *pastores* つまり農業プロレタリアート *pueri* は、行軍の路々で、喜捨をうけつつ、戦前の日本人の満蒙開拓団に近い気持で参加したものが多かったのではなかろうか。

このような性格の十字軍を、*Children's Crusade* と称すること自体が、すでにおかしいのであって、これを少年十字軍と訳し、年齢の意味で少年と解して教授することは、歴史の真実を、いちじるしくゆがめることになる。補助教材としては、単なる伝説として、導入のために利用する程度ならば実害はなかろうが、年表に記入して表示したり、フランスのエチエンヌの物語を、真実の如くに説くことは、もはや許されない。

歴史教育は、真実を教えるべきであって、子供の関心が単に高いから取りあげるというのでは問題である。

本文の執筆にあたり、大阪大学のMGHを利用させていただいた。紙上を借りて、阪大当局者に深甚の謝意を表する次第である。

(1978年10月20日受理)